博士学位論文審査要旨

２０２０年7月２４日

論 文 題 目：Rethinking International Student Migration in Japan: Imagined Global Jinzai in the Absence of Immigration and Cosmetic Internationalization of Higher Education
（日本における留学生移住の再考 ― 移民の不在と高等教育のコスメティックな国際化に想像された高度人材 ―）

学位申請者：權大聖
審 査 委 員：
主　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　冨山　一郎
副　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　小山田　英治
副　査：国際教育インスティテュート　教授　Gregory Poole
副　査：グローバル教育センター　教授　Robert William Aspinall

要　　旨：

權大聖氏の学位申請論文は、現代日本における留学生制度と留学後の高度人材としての日本での雇用の連関性について考察したものである。その際、短期雇用ではなく、長期の雇用の可能性に焦点を当てられており、したがって、留学生にかかわる高等教育政策と高度人材にかかわる移住・定住を視野にいれた労働政策の重なりが、最大の論点として議論されている。いいかえれば同論文は、留学生教育を移民問題として考察しようとする挑戦的な論考になっている。

全体を貫く問題意識は、留学生が「帰るべき人」であるという、高等教育や労働政策にかかわる認識に通底する前提を問うことにある。すなわち日本の高等教育における国際化が、日本社会の多文化社会への動きと切り離されて設定されているところに、労働力としては受け入れても移民としては受け入れない日本の労働政策の問題と、新しい社会の構築に結び付かない、いわばうわべだけの国際化という高等教育政策の問題の、二つの重なり合う問題を浮かび上がらせた。このような留学生をめぐる高等教育を移民問題として正面から論じた研究は、ほとんど例がない。權大聖氏の研究は、これまで教育問題として論じられてきた教育の国際化と雇用問題として論じられてきた外国人労働者問題を、一つの日本社会の課題として提示したものである。またその課題は、日本にとどまるものではない。

研究の方法としては、膨大な政府の行政文書や中央教育審議会をはじめとする審議会関係の文書をもとにした制度分析と、政策にかかわる政治的言説の分析、教育や雇用だけではなく国際化やグローバル化にかかわる様々な表象に対する表象分析、またナラティブを中心にした留学生へのインタビュー調査が用いられている。また理論的フレームワークとしては、社会学、教育学、移民研究、日本社会論に加え、人的資本論が、全体を貫いて採用されている。論文全体は６つの章で構成され、加えてプロローグとエピローグがあり、総ページ数は259ページからなる。第一章では課題と方法が展開され、第六章は結論にあてられており、本論部分をなすのは第二章から第五章である。

まず第二章と第三章の前半部分は、主として日本の高等教育にかかわる留学生制度と外国人労働者の受け入れにかかわる入管体制も含めた政策分析にあてられており、そのさい、上述した「帰

るべき人」という前提を問う作業が、留学生を移民問題として考察することにより可能となることが示されている。すなわち權大聖氏は、現代日本社会において高度人材が求められているにもかかわらず、留学生にかかわる高等教育政策では帰国が基本的前提として立てられていることを、日本の政治過程における移民政策の欠如としてとらえ、その不合理性を実証的に指摘するとともに、労働力不足ならびに高齢化社会に向かう日本社会においては、高度人材としての留学生の雇用の必要性とそのための社会保障を軸とした移民政策が重要であることを、人的資本論の立場から提言している。

後半の第四章と第五章では、なぜ移民政策が欠如しているのかという問題を、戦後から今日に至るまでの日本社会における国際化、グローバル化にかかわる言説と表象の分析を通して明らかにしている。そこでは、日本研究者のテッサ・モーリス・スズキが日本の多文化主義を「cosmetic」と述べたことを引きながら、日本の国際化を、副題にもある「うわべだけの国際化（cosmetic internationalization）」と表現し、考察している。また言説分析においては、大学における国際化、グローバル化にかかわる高等教育政策が詳細に検討されていると同時に、この「うわべだけの国際化」が日本社会に深く根ざした隠された排外主義の問題であることを指摘している。かかる意味で權大聖氏の研究は、新自由主義の中での大学論および多文化主義にかかわる日本社会論でもあり、前半で展開した具体的な政策提言を、大学論、日本社会論の領域に再設定し、国際化やグローバル化にかかわる表象や言説に内包されている日本的文脈をあぶりだして考察したところに、氏の研究の特筆すべき優れた点があるといえるだろう。

審査では、上記のような諸点が高く評価されたと同時に、いくつかの問題点も指摘された。第一に、用いられる多文化主義や文化的同質性といった文化概念にかかわるさらなる理論的な検討の必要性であり、第二に理論的枠組みとしてある人的資本論への批判的検討の必要性である。さらに第三に、上記のような「うわべ」に隠された根強い排外主義を批判する中で、その不合理性を強調するあまり、より合理的な真の新自由主義的政策を希求するような論調になっている点も問題点として指摘された。しかしながら、こうした問題点の指摘は、申請者の将来性への期待でもあるということも確認され、論文審査委員会は、權大聖氏提出の学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

２０２０年7月２４日

論 文 題 目：Rethinking International Student Migration in Japan: Imagined Global Jinzai in the Absence of Immigration and Cosmetic Internationalization of Higher Education
（日本における留学生移住の再考 ― 移民の不在と高等教育のコスメティックな国際化に想像された高度人材 ―）

学位申請者: 權大聖
審 査 委 員：
主　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　冨山　一郎
副　査：グローバル・スタディーズ研究科　教授　小山田　英治
副　査：国際教育インスティテュート　教授　Gregory Poole
副　査：グローバル教育センター　教授　Robert William Aspinall

要　　旨：
2020 年 7 月 22 日（水）午前 8：45 から 10：15 時まで、提出論文の内容について質疑応答を行い、申請者の学力を計る総合試験を実施した。最初の 40 分間のプレゼンテーションでは、申請者が論文に関係する移民研究や日本研究の学問分野の基礎を身につけているか、分析手法についての妥当性や分析のための十分な専門知識を有しているか、といった諸点が確認された。50 分間の質疑応答では、審査委員より多くのコメントと質問が提出され、申請者はそれぞれの質問に対し丁寧に回答した。日本研究である同論文は英語で執筆されており、従って総合試験の質疑応答は日本語と英語の両言語で実施された。審査委員の質問とコメントに対し、申請者は日本語と英語の両言語で的確に答え、語学能力的に問題ないことも確認できた。よって、審査委員全員は、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：Rethinking International Student Migration in Japan: Imagined Global Jinzai in the Absence of Immigration and Cosmetic Internationalization of Higher Education
（日本における留学生移住の再考 ― 移民の不在と高等教育のコスメティックな国際化に想像された高度人材 ―）

氏　　名：權　大聖

要　　旨：

Japan has been averse to immigration due to a strong belief in homogeneity in terms of ethnicity and culture; and although Japan has already turned into a de facto country of immigration, it has continuously maintained a restrictive attitude towards immigration. Mass immigration is constantly a very sensitive topic discussed in Japanese society. However, with its birth rate among the world's lowest, the country consistently faces problems stemming from an aging society, a shrinking labor force, and declining productivity. In order to revitalize its stagnant economy, the third largest in the world, one avenue the government has looked towards is foreign human resources. Observations of Japanese migration policy clearly shows that the government is moving away from a restrictive immigration regime towards a more liberalized and settlement-oriented approach. It has proactively been enticing qualified foreign migrant workers – both the highly skilled and lower skilled - by introducing more flexible working visa systems, whilst at the same time easing the requirements for employment and residence. Meanwhile, the government and private sector are attempting to recruit international students to use as a pool of skilled workers and temporary laborers. Indeed, there is an increasingly growing demand for *ryugakusei* (international students) particularly from the three major stakeholders of the economy - government, universities, and enterprises. Over the last few years, the number of international students in Japan has hit record highs each successive year, and the employment rate of international student graduates is increasing.

However, despite Japan's rapidly changing structural environment towards 'immigration', which has evolved from the recent liberalization of the country's migration policies and policies towards international students, the notion of *zentei*, or the premise that foreigners (or foreign residents) are 'temporary being' or 'guests', has remained unchanged. The presence of *zentei* is causing a lack of immigration, and a cosmetic internationalization of higher education. International students are existing as both foreign laborers to be integrated, and 'imagined global *jinzai*– which refers to international students who only exist in the global *jinzai* discourse, not existing practically in Japanese immigration and internationalization of higher education policies.

Against this background, this study attempts to critically examine and dispel the perceived

ambiguity, superficiality, and contradictions of immigration, national identity, and internationalization in higher education in contemporary Japan - particularly through the lens of 'international student migration to Japan'. The findings of this research point to ways in which Japanese society can practically utilize international students as a source of skilled immigrant workers in response to its rapidly aging population, as well as a means of creating a new multicultural society in contemporary Japan by going beyond the fixed premise or *zentei* that foreigners are currently existing in.